

912.3
ケ
[]

中
集
冊
內

小
冊
五
卷
子



源大吏

脇三大臣 将衣大口藤茅扇

魚帽子調子掛子柱



皇氣風き名は日乃本やぐくつこの系

系より人 哲是為今亦はるを常は下之

まては尾羽舞田乃の神は具神也て是

馬をさるゝ系後ゆせとの室名と歌り共と

舞田乃の神へ系後仕小なふもとて

あふ沙代の流えりや

て名取はしを部乃名取まてすまは
乃名取はしを部乃名取まてすまは
て是そげ舞田乃名取まてすまは

志の領も舞田のまふまてはく舞田

あやうするゆては
一して尉あ衣キカレ公事持
男取警あ衣キカレ扇
まのまのめあまをささらふ領あし風を
己れの本領は 舞田乃名取まてすまは

久き代よりはへまぬま是を名取
年く一は史婦の者まては也そま
舞田乃名取まてすまは
まのまのめあまをささらふ領あし風を
己れの本領は 舞田乃名取まてすまは

我かゝるにきくへは波あまな
くさん法門ゆふのなをよそ
ぬれのをくまをあびなりか
まをひきりまをひりてむか
上はまをひきりまをひりて
まをひきりまをひりてむか
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと

我多う天より星をひきり
あまなと老とあまなと

あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと

海
たつての海にさなる海は津をめぐりて
空もつらうひとくは神のまへひては
地よりうひとくは事ハもむかた
公乃乃海地もこころ人集れあぐあ
社の西地をこころよき道乃のあぐん
不意ハ沙理りよてい系と苗社と戸を
柳をたて庫一ると田一神乃の中流し
と

色もそ神指さののちろみとあま乃あま
いりり海文化里ありし時ハもま
雲ハ重地はまは免よハ重地はくは金
垣と爰もこけ結をあら物とあまを
さ波はひそよこいそれまきけあま
たやまハあまこけ一神ハ免といわ
る乃のちなるうたをこく 信を信

海神の宮乃神速なりけり
うす乃乃まき湯名をわ
こ地神又伝ふ天照大神乃
さのおれきりつと乃西よ
らく交わしつり愛ふむの川上
らくいりありある人として
老人夫婦中おれをいせ死
てなむか

だらきをいふもるゆり
かや我きてる川ら河
をいふと娘といふ老も世
とあしひなりとせむ
えき後よ世乃なんをの
た後悦のうら量へか
まきりありありて大池を
まきりありありて大池を

神祕のまゝに人なをさへしらすら
 ちんちんといふなりまあるまの
 神祕のまゝに人なをさへしらすら
 ちんちんといふなりまあるまの
 神祕のまゝに人なをさへしらすら
 ちんちんといふなりまあるまの

此の江とあるれい 我々てあつち
 秋 あつち夫婦 是まで 飛来する
 日 上 此の江とあるれい 我々てあつち
 秋 あつち夫婦 是まで 飛来する
 日 上 此の江とあるれい 我々てあつち
 秋 あつち夫婦 是まで 飛来する

北面悪尉 白堂 清き 袴衣 大口 腰帯 扇

我ら 是れ 乞ふ 必 玄相 乃 室を 都く う井の
ちゆく ちら 會 小むらり とも へ 結縁の 成
生 けう 二乃 非 橋 娘と あり たり 我を
又 玄 深 此 家 生を 利 益を 人 して 東 海 なる
日 秋 小 吉 侍 源 大 更乃 非 なる 我の 也
何 くる 難 や 幸 小 あり けり 此 沙 新 向

かん ちひ 行 不 光り して 心 ぞ あり 斗之
悲 して 色 法 女 ぞ 何 くる さ ば ば ち 兼 糸 糸 の 掛
を け ぐ し ば 掃 人 不 見 掃 人 みる 人 雲

天女 とい され ず たり ぬ 役 とも 糸 竹 の
甲 じ とも なる ち 被 乃 役 外 身 源 幸
か かせ へ じ さら せ ぬ 思 出 する じ だ 也
お くる ち 被 の ち 役 守 色 だ へ なる じ 曲

源一
源二
源三
源四
源五
源六
源七
源八
源九
源十
源十一
源十二
源十三
源十四
源十五
源十六
源十七
源十八
源十九
源二十
源二十一
源二十二
源二十三
源二十四
源二十五
源二十六
源二十七
源二十八
源二十九
源三十
源三十一
源三十二
源三十三
源三十四
源三十五
源三十六
源三十七
源三十八
源三十九
源四十
源四十一
源四十二
源四十三
源四十四
源四十五
源四十六
源四十七
源四十八
源四十九
源五十
源五十一
源五十二
源五十三
源五十四
源五十五
源五十六
源五十七
源五十八
源五十九
源六十
源六十一
源六十二
源六十三
源六十四
源六十五
源六十六
源六十七
源六十八
源六十九
源七十
源七十一
源七十二
源七十三
源七十四
源七十五
源七十六
源七十七
源七十八
源七十九
源八十
源八十一
源八十二
源八十三
源八十四
源八十五
源八十六
源八十七
源八十八
源八十九
源九十
源九十一
源九十二
源九十三
源九十四
源九十五
源九十六
源九十七
源九十八
源九十九
源一百

あるしちせひのあふあふしてらん
いさよくてんよせうをよきりあう
のやりたる時におう後をあと辞た
井戸の時梅のかとあつふならぬ
お小梅の初乃使きてう名跡乃ん
あうやくあう名跡のう城系の飯乃
あや二十又廿ひのあまの二春らあ

あはれなる心なする世の世なりと
あはれなる心なする世の世なりと

[Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page]

放生河

聊三大長

信州千代友桐守根
狩衣杏腰帯 初持

あはれなる心なする世の世なりと

あはれなる心なする世の世なりと

あはれなる心なする世の世なりと

あはれなる心なする世の世なりと

あはれなる心なする世の世なりと

あはれなる心なする世の世なりと

七三三
 七四一
 七四二
 七四三
 七四四
 七四五
 七四六
 七四七
 七四八
 七四九
 七五〇
 七五一
 七五二
 七五三
 七五四
 七五五
 七五六
 七五七
 七五八
 七五九
 七六〇
 七六一
 七六二
 七六三
 七六四
 七六五
 七六六
 七六七
 七六八
 七六九
 七七〇
 七七一
 七七二
 七七三
 七七四
 七七五
 七七六
 七七七
 七七八
 七七九
 七八〇
 七八一
 七八二
 七八三
 七八四
 七八五
 七八六
 七八七
 七八八
 七八九
 七九〇
 七九一
 七九二
 七九三
 七九四
 七九五
 七九六
 七九七
 七九八
 七九九
 八〇〇
 八〇一
 八〇二
 八〇三
 八〇四
 八〇五
 八〇六
 八〇七
 八〇八
 八〇九
 八一〇
 八一一
 八一二
 八一三
 八一四
 八一五
 八一六
 八一七
 八一八
 八一九
 八二〇
 八二一
 八二二
 八二三
 八二四
 八二五
 八二六
 八二七
 八二八
 八二九
 八三〇
 八三一
 八三二
 八三三
 八三四
 八三五
 八三六
 八三七
 八三八
 八三九
 八四〇
 八四一
 八四二
 八四三
 八四四
 八四五
 八四六
 八四七
 八四八
 八四九
 八五〇
 八五一
 八五二
 八五三
 八五四
 八五五
 八五六
 八五七
 八五八
 八五九
 八六〇
 八六一
 八六二
 八六三
 八六四
 八六五
 八六六
 八六七
 八六八
 八六九
 八七〇
 八七一
 八七二
 八七三
 八七四
 八七五
 八七六
 八七七
 八七八
 八七九
 八八〇
 八八一
 八八二
 八八三
 八八四
 八八五
 八八六
 八八七
 八八八
 八八九
 八九〇
 八九一
 八九二
 八九三
 八九四
 八九五
 八九六
 八九七
 八九八
 八九九
 九〇〇
 九〇一
 九〇二
 九〇三
 九〇四
 九〇五
 九〇六
 九〇七
 九〇八
 九〇九
 九一〇
 九一一
 九一二
 九一三
 九一四
 九一五
 九一六
 九一七
 九一八
 九一九
 九二〇
 九二一
 九二二
 九二三
 九二四
 九二五
 九二六
 九二七
 九二八
 九二九
 九三〇
 九三一
 九三二
 九三三
 九三四
 九三五
 九三六
 九三七
 九三八
 九三九
 九四〇
 九四一
 九四二
 九四三
 九四四
 九四五
 九四六
 九四七
 九四八
 九四九
 九五〇
 九五二
 九五三
 九五四
 九五五
 九五六
 九五七
 九五八
 九五九
 九六〇
 九六一
 九六二
 九六三
 九六四
 九六五
 九六六
 九六七
 九六八
 九六九
 九七〇
 九七一
 九七二
 九七三
 九七四
 九七五
 九七六
 九七七
 九七八
 九七九
 九八〇
 九八一
 九八二
 九八三
 九八四
 九八五
 九八六
 九八七
 九八八
 九八九
 九九〇
 九九一
 九九二
 九九三
 九九四
 九九五
 九九六
 九九七
 九九八
 九九九
 一〇〇〇

八幡山ふきての折体らひ神秘のお細を

ぬふするふし一対水衣 水桶右持

又上 緒入生身と敷川河波お月も物や坊の

水外山松の色色と祓の意乃をわん

上 文回と治め人を表へ吾と表へ吾と

去事とく奴湯代乃例なる故ま志を

る、海系津と切ちも又あまひの

かし控長の竹表とゆふら吾也乃乾

ひさよれか海魚の乃廣と摺乃

海をん鱗の生とる生る拙うして

魚をばさむるに似て救生にあらざるも
おぬ事をおぼへしうとて故人の文を写
す方便の救生にて善蓮の善行はと
ゆるとらふもすてやをさるるを救てハ
ハの道我未ハ又悔く捨ひ乃綱よりぬ
非乃意をなむむり かくて笑はる非や
相くせ尚と救つるもとて謂はるるも

是も通法乃沙阿小毎此款をり
志強も一養生の善根乃をぬ又救生
形をたうとて 謂はるる非や相
生尚を救つるも河にたつ非やらむ

後今いばゆ何乃水の流るを非徳の捨ひ
信する信あり来ひはれそは河の流
からきて ぬ桶は ちりけい 繕とて

まんどく 糞濯も月一 舂びらくじま
やんのかろみ桶と水磨小洗むは臭
ははひ 糞もろやみ紙もろて 糞は乃
漂若 臭物くも魚乃 糞も換の臭も
生家と糞のろるり 糞ひあつた成るり 糞

教生舎の子細意不古物使久 恵よりよふ
すふあせい 作由社とく 飲酌天皇の若もよ

里一百余年の世とてびし小梅りた
あまの 糞と 糞磨の 糞うして 糞代を
あつた 糞と 糞磨の 糞うして 糞代を
く 糞うして 糞磨の 糞うして 糞代を
糞代は 糞磨の 糞うして 糞代を
糞代は 糞磨の 糞うして 糞代を
糞代は 糞磨の 糞うして 糞代を
糞代は 糞磨の 糞うして 糞代を
糞代は 糞磨の 糞うして 糞代を

此の今あらむ人も誓ふ世に
 志強りんのも高擧せしめ
 此の法のあらはれぬ世の
 の心も洗はれん光も三
 されどもや宗廟乃政治
 成乃を起りて世運民の
 心も洗はれん光も三

此の今あらむ人も誓ふ世に
 志強りんのも高擧せしめ
 此の法のあらはれぬ世の
 の心も洗はれん光も三
 されどもや宗廟乃政治
 成乃を起りて世運民の
 心も洗はれん光も三

たぐり福あり本澤^四中^五の神の若きあり
難^ニや代^一系^二位^三へ^四ち^五も^六百^七余^八系^九の春^十林
を^{十一}あ^{十二}ら^{十三}ひ^{十四}て^{十五}神^{十六}法^{十七}を^{十八}う^{十九}や^{二十}り^{廿一}男^{廿二}の
よ^{廿三}ま^{廿四}の^{廿五}神^{廿六}に^{廿七}我^{廿八}あり^{廿九}と^{三十}名^{三十一}系^{三十二}と^{三十三}は
ま^{三十四}男^{三十五}と^{三十六}鳩^{三十七}の^{三十八}杖^{三十九}よ^{四十}す^{四十一}る^{四十二}ま^{四十三}て^{四十四}山^{四十五}と^{四十六}き^{四十七}う^{四十八}て^{四十九}ら
ら^{五十}り^{五十一}く^{五十二}ぬ^{五十三}ま^{五十四}武^{五十五}内^{五十六}長^{五十七}り^{五十八}ふ^{五十九}ね^{六十}き^{六十一}道^{六十二}神^{六十三}ひ^{六十四}
た^{六十五}も^{六十六}を^{六十七}お^{六十八}つ^{六十九}け^{七十}て^{七十一}も^{七十二}行^{七十三}念^{七十四}を^{七十五}後^{七十六}し^{七十七}ま^{七十八}る^{七十九}神^{八十}院^{八十一}の

へ^上と^一矣^二と^三と^四も^五と^六神^七乃^八代^九の^十く^{十一}あ^{十二}た^{十三}は
わ^{十四}ら^{十五}た^{十六}成^{十七}り^{十八}り^{十九}と^{二十}い^{廿一}は^{廿二}庵^{廿三}元^{廿四}ふ^{廿五}杖^{廿六}神^{廿七}系^{廿八}の^{廿九}ま^{三十}へ
て^{三十一}是^{三十二}も^{三十三}若^{三十四}者^{三十五}蓋^{三十六}さ^{三十七}ら^{三十八}る^{三十九}ま^{四十}あ^{四十一}ら^{四十二}た^{四十三}は^{四十四}も^{四十五}奇^{四十六}物^{四十七}
な^{四十八}ら^{四十九}り^{五十}と^{五十一}う^{五十二}か^{五十三}く^{五十四}面^{五十五}石^{五十六}と^{五十七}系^{五十八}初^{五十九}冠^{六十}皇^{六十一}
鉾^{六十二}巻^{六十三}侍^{六十四}衣^{六十五}大^{六十六}舌^{六十七}囉^{六十八}重^{六十九}角^{七十}あ^{七十一}ら^{七十二}る^{七十三}難^{七十四}や^{七十五}百^{七十六}五
ち^{七十七}後^{七十八}の^{七十九}月^{八十}と^{八十一}名^{八十二}を^{八十三}夢^{八十四}系^{八十五}不^{八十六}思^{八十七}よ^{八十八}と^{八十九}夫^{九十}う^{九十一}た^{九十二}た^{九十三}と
百^{九十四}代^{九十五}乃^{九十六}杖^{九十七}即^{九十八}し^{九十九}ん^百和^{百一}光^{百二}の^{百三}影^{百四}も^{百五}雲^{百六}り^{百七}あ^{百八}ら^{百九}
神^{百十}と^{百十一}云^{百十二}と^{百十三}い^{百十四}つ^{百十五}う^{百十六}の^{百十七}長^{百十八}武^{百十九}内^{百二十}と^{百二十一}巾^{百二十二}を^{百二十三}人^{百二十四}あり

出航の音も現してぐるりめぐりて
神の御幸もまたおぼしめされ
鴨の湯 山を下つたる神海の人
息の衣れ袖とてさしめられ
久等八月の桂も男山
おのゝ神代色和奇をあげて
と宿る御目もとまらぬ申す
あま振成天しめ
さやかしに
さやかしに

かゝる神を敬むるははるか昔
とわさてもあつて舞はれ
とあきて喜春菜を飾るよ
ちていつ成舞を奏はる
河中に流ひてえゆる
よ 神ととも
さう踏舞の拍子

神を祀るに秋月祭とて諸の御日救も護る事
の由は 此書に神を祀るに 板百本を祀る
ハ 大文字の御文あり 板十 ちんたふ
花の冠をうけて居りて居りて居りて居り
水衣系を冠をうけて居りて居りて居りて居り
花も御をえりて居りて居りて居りて居り
も納めたるおあはれを御をれなく



大臣以下

鶉鳴

脇三大臣

鳥幡子銀子樹を板作り地 粘衣大口勝手扇くらねり

侍舟や島の非ありてく 板の八面一

かまへく 柁是れ為今に仕合を御座下

也。おは丸あうちの志屋は非代は直治光

出方の福ふ唯しきひまうとれあへき若

仕の 格衣形をもちかき板切り屋のく

浦さへけては板く。肩をてんを板屋

...の志をふまに...
...の志をふまに...

是の志や丸翁宇戸の志をふまに...

神の志を敬ふと云れ...
神の志を敬ふと云れ...

て一方とふまに...
て一方とふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

...の志をふまに...
...の志をふまに...

雲うれはるるそと舞うらるる霞よはるる霞よはるる霞よ
色もささるる霞よささるる霞よささるる霞よささるる霞よ

鴉羽あふいあつをほのきさうらや也さうら也生

日じ梅乃らふあわらうの甲毎連ハ佳例小何を

てかり夜をゆりうの元あくあきこもあ

偶と空ハ鳥飛やなきさほとと愛あえ

春色ささるるあ里帳 非乃山後のもり

と並なるあ代おゆさあく 今と見と

志系計まりり かげや破の波小あく

おきもまのか翅そくくおれんかきねく

舞中かや 浦風色ねもとく 千原

昼迅風波あふく 若さあをを片抱

色新とさあ風あをあけやさくあけ

あふあふああ花のあさる此のあ風あ

人あらずと行じやゆふ途新なる人
まの道に宿りてあるもし おろ 面おもえり
美世中のあはれあまは清奥のいふ
をあるて衣を織こかやいあまはけ
うらもあかり非乃あれぬいひ
あかりやよのちをあるとあや非乃
あはれぬらん 目上 ちやみ書のかつて
美

ちるあり白落れおまつりゆく
朝のぬあまのえのちをへてあ
とまをまじり橋名あのを乃あ
下 目上 探いあけいもあぬふよ
たまくとあまをえりあまの
月洗せりの影あけぬふよ 目上
あけさるる守柳あまをえりて

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

珠の玉の在る所と云はれりて
珠は珠乃玉れを言ふ河くまふそ
一 珠は

珠の玉の在る所と云はれりて
珠は珠乃玉れを言ふ河くまふそ
一 珠は
珠の玉の在る所と云はれりて
珠は珠乃玉れを言ふ河くまふそ
一 珠は

八
 海をこののきりし時霧を言へて法をゆし
 熱女能事さく人の見るめさうりや海に
 おしき声垣のうらふ念ふはと非とを唯
 らめさよふさめらよと非か我へと海にいま
 名ふさりく一婦さめあやさゆさく
 は相法小臨居て風とうそふく寅の時
 非の法をもゆくらんく

面泥眼診裁彦高
 持衣律切腰茅扇

わて上

三言

八家の妙女、氣珠と持て愛を祝し我へ
 湖乃霞下の玉と持て賢人の法と珠をかり
 ぬ非や 南宮波衣女光まぬ玉 或は不取
 雲元の雲の玉 又か空を雲は海は波非ぬ珠
 日上一八二一の玉と持て賢人の法と珠をかり
 たりやあはぬ非や 下珠と海小沈むまはく
 雲をく携て多なる言と海増減は霞下の玉まぬ
 雲をく携て多なる言と海増減は霞下の玉まぬ
 雲をく携て多なる言と海増減は霞下の玉まぬ
 雲をく携て多なる言と海増減は霞下の玉まぬ

山越山越其状如... 唯形もくま... 唯一のま... 唯形もくま...

書札

勝三太

鳥帽子調度殿 孟板依殿
 綿衣大口腰帶扇 燈

柀を極度天會小けくなる... 山越山越其状如... 唯形もくま...

乃浦小住志あるる為形依是乃之志

志と納受し地とうるおふまじきと

事りそり わさ ともまはなむるじり

なるるるのまふらん た ともか

といや相そり し やい年まて

慈となく し かなれ た 志とま

酒いぬ乃 し 小世まある竹の杖依

下
是りまふ し 志ありておひよう物思と

ふなれ し 志 し 志い乃本 し 志

被わか し 志 し 志 し 志 し 志

下
丹乃鏡又泰 し 志 し 志 し 志

上
車 し 志 し 志 し 志 し 志

上
楊柳 し 志 し 志 し 志 し 志

上
秋 し 志 し 志 し 志 し 志

年乃松ハ枝あり 名をて海に木の枝が
かたじけなくと柳葉をハ非乃をさす本心
ありさる海へ 名をて海に木の枝が
くさくして山別重なるの文字をさるりよふ何
多沙人 重れを右上げて居てさく
松我まらまら教んれ出垣乃うらふまら
多沙重羅門乃海運すまらさる人なる伏

ハ何とまらりしとまられていそ 半もあわ
伏見乃ま居ば多社乃事ある人 あり

上 せりも伏見とハ物しと日本此名なり
倅井倅倅特冊のさ天れ君念の若造り
ゆいへく見物しとらしとまられハ伏見とハ
枯傳語の名ある人 日中 美人とあまなり

けいもくしりしりのまのまもりたはるるまもり
 現をわねる光の中らとてさるるれを
 居てりさるる様ふさるるありて虚をふ
 おありしてははばばをたえはははるる
 め天はをまの神はなまもも我をまも
 お思ひてまて文井を化しありて
 如漢類記のちうとありまもさるる小沙波にまも

中入後々格カリカ かつふむて
 其の條の神をゆりなま
 ちるへうがらあなまもまもり
 ちりぬまもり 唯ゆるせよ神をまも
 外へまもり 飛をまもの沙れに

練光を何れかふるふらんてはふもあまをほり
 沙路おぼえくわふるふらんてはふもあまの
 八百兼代のさるしなまわし西暦路状
 のまぬの月牙さそ又月よふさそ入なる
 わるある神を板乃ひらり本西神純叙
 くよたを神かたの西暦を討ちひき
 よめさあも重胎支那乃がらちあり

かくとほまゆあなまそえ早そとほまる
 西暦の甲となまわも六舟の舟に水植乃
 あとをふほまゆあなまそえ東夷初成南
 常水植乃あそれあそまひすを地一銀
 を治めまもあふ民をもちり乃はれはま
 おおまゆあなまわらけさうあそるまそあ
 けさうあなまわらけさうあそるまそあ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

養分

吳服

脇三大臣

舊帽子調友掛系松箱多
大口脇等肩つ連同方

道のみらむる時そやく
西に極くうなる

らん 柞色萬今ふつふ
を海に下り

我着形乃子細をふふ
る中位者此の形未

後信くぬ又是より
中位海にひふぬ乃
より入

美よりやこぬぬ
乃の海や東に波の

浅き海
玉葉の海なる海七人
なり

色をくみ家難波流づく水の浦をな氏
元の家吳服乃里小恙ふりく

種ふもいもやはお吳服乃里小恙ふりく又
色なる松原よあけりて棧の言れあは立

越こえりやと好よして女衣女衣袖云肩云云吳服吳服

里績衣の浦里小羊種てさびや毛お

立よ尚波と白糸乃 棧織うあ尚おる志

是は津島吳服の里に値てふしき

二の者我は圓小あ甲なから方ハ唐城あり

物お女工の着をいひあ尚月のるさや死のあ

波流を尚ふあかこの方を唐人の身を

種て家小吳服の里までと身小恙ふりく

色なる風サ色色かあは代乃た成

甲ひえり棧乃右棧乃織か

甲ひえり棧乃右棧乃織か

ありては... 又同...
 那... 世...
 二...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...

二村... 人... 服... 心... 我... 志... 川... 心...

三... 十... 十... 十... 十... 十...

あくき勝の里小をさく入連日なる
棧の神とあむく七後乃由衣とを海物
役奉仰んまうは敷成まらふまあう
其のるも名付く表跡を心衣の紋とあ
毛名ふるま心跡をさうつとせしき
ありま名ふるま心跡をさうつとせしき
心跡をさうつとせしき
心跡をさうつとせしき

昔のぬい酒なるる一と云ふなり
よるも服乃文字とをうつけしれ
たどりあやたさりや名付さる心跡
年を連へくまをなす七後の神乃
考衣の心跡をさうつとせしき
心跡をさうつとせしき
心跡をさうつとせしき
心跡をさうつとせしき

一 乃の心は西本ののつくりなりとせり
 二 たるひをやあ巻の送りしるる
 三 時代くか けき乃か けきせと
 四 波お多しそそ家様乃言 神を
 五 穢けは物の中お想字乃字をわらう
 六 衣う石乃上ふ想あれを 木の風
 七 又ハ祇うは波乃言 せきうのふは

一 乃このの美なるも其服は子らの糸
 二 わらう海にあやえ 踏木の足をと さら
 三 せしやちちう せきうのふは
 四 せきうのふは せきうのふは
 五 せきうのふは せきうのふは
 六 せきうのふは せきうのふは
 七 せきうのふは せきうのふは
 八 せきうのふは せきうのふは
 九 せきうのふは せきうのふは
 十 せきうのふは せきうのふは
 十一 せきうのふは せきうのふは
 十二 せきうのふは せきうのふは
 十三 せきうのふは せきうのふは
 十四 せきうのふは せきうのふは
 十五 せきうのふは せきうのふは
 十六 せきうのふは せきうのふは
 十七 せきうのふは せきうのふは
 十八 せきうのふは せきうのふは
 十九 せきうのふは せきうのふは
 二十 せきうのふは せきうのふは

正徳四年甲午曆元生吉日
新開板不也
并衣裳付秘密之拍子以
章句寫之今開板不也
正徳四年甲午曆元生吉日
新開板不也



此本者下掛リ新板改正

并衣裳付秘密之拍子以

章句寫之今開板不也

正徳四年甲午曆元生吉日

新開板不也

谷口七九清門



洛陽書林

七郎兵衛

七郎兵衛



